

小学校英語 Just Now

★本コラム中のご所属・拠点校等は、平成21年1月のものです。

I 米百俵で育まれた子どもたちと教師は、今

We are Nagaoka's future. 阪之上小学校では恒例の「英語劇『米百俵』*」の最後に6年生全員が誇らしく叫んだ。ALTにこの出来事を伝えるための英語劇である。子どもたちの「伝えよう」とする熱意が痛いくらいに伝わってくる。同校の高橋幸雄校長は、終わりのあいさつで、「米百俵の精神として一般に知られていることに合わせて『自分を大切にし、他も大切にすることです』と述べた。

拠点校となった新組小学校は、『英語ノート（試作版）』（文部科学省）をベースに、教育委員会と同校がいままで積み上げてきた教材や指導法を融合させている。同校の研究発表会では『英語ノート』を活用する教師の姿が印象的で、子どもたちは「伝えることができた喜び」で笑顔にあふれていた。

拠点校でなく、『英語ノート』等が配布されていない寺泊小学校は、寺泊中学校と大河津小学校とともに研究授業を行った。そこでは教師と子どもとの間に温かいものを感じた。また関原小学校は、夏休み中に「英語嫌いをつくらないで中学校に子どもを送る」ことをテーマにし、「まずは教師が大きな声で英語を口にする」という研修を行った。

そして中学生には、市国際交流協会主催の2つの海外派遣と、4日間、6～7名でネイティブスピーカーと1日中英語に浸ることのできる「イングリッシュアカデミー」を用意している。今年度は約120名の生徒がこれらの3事業に参加した（3年間通して、20人に1人以上もの生徒が希望により参加）。

『米百俵』の精神は、現在「熱中・感動・夢づくり教育」事業として、外国語関係だけでなく61事業が用意され、営々と引き継がれている。「教師が熱中や感動し

米百俵のまちの外国語活動

杉山 敏 Sugiyama Satoshi
(新潟県長岡市教育委員会)

なければ、子どもが前を向いて何かをやろうとしないのではないか」という、加藤孝博教育長の指導は象徴的である。

II 英語指導室という組織

教育委員会の学校教育課には英語指導室という組織がある。平成4年にALTを1名採用した。平成6年には英語指導員（日本人）を採用し、平成7年には小学校英語活動を始めた。ALTと英語指導員の小学校へのペア派遣を「長岡方式」と呼んでいる。平成9年には5ペアとなった。現在は13名のALTと9名の英語指導員がいる。小学校には（平成20年11月の免許法改正により今後の動きは不明だが）基本的には英語教師はいないので、英語指導員は、ALTを育て、小学校教師とALTとの間に入り、英語活動を円滑に進めることが主な職務となる。また、英語活動実践の手引の作成や小学校教師の研修の補助にもあたっている。

先人には先見の明があった。ALTの数をひたすら増やすのではなく英語指導員を合わせて増やしていったことが見事に功を奏し、小学校外国語活動の必修化が決まっても何の揺らぎもない。『英語ノート』等が現場にどさっと来たときに、現場は一時的に混乱しても、それは時間の問題で、市内の小学校教師はすぐに自分たちのものにしていくはずであろう。

平成9年の時点で、すでに「小学校の英語活動は、語彙や表現を教え込むものではなく、楽しい活動を通して児童の英語への興味・関心を高めるものである。英語という言葉を通して、人と人とが出会い、かわりを深めていくことが大切である」という基本方針が提言されている。低・中学年で英語活動がやりにくくなったことを除けば、長岡市では10年以上前から、新学習指導要領の小学校外国語活動のねらいはクリアできている。学級担任と英語指導室の事前の連携

があり、実際の授業で、学級担任・ALT・英語指導員がいる手厚い指導によって、子どもたちのコミュニケーション能力の素地を自然に身に付けてきた。

Ⅲ 長岡の火を守ろう

平成20年4月、文部科学省の指示で、1～4年生の英語活動がやりにくくなった。教育委員会事務局は、「長岡市はどう受け止めるのか。市として時数の目安をどのように示すか」という検討に入った。南雲茂小学校長会会長（表町小学校長）をはじめ市内の校長と慎重に打ち合わせしながら、検討を進める中で多くの校長から励ましの言葉をいただいた。

その後、英語活動において実績のある京都市や横浜市など、多くの教育委員会に電話をし、1～4年生への対応を伺い、ご多用の中、熱いメッセージをいただいた。そして、いただいた情報を元に徹底的に討議し、1つの結論に至るまで3ヶ月要した。

結果として、横浜市のケースを参考に、当市のいままでの積み上げを継続していくことにし、現在その詰めに向かっている。その基本姿勢は「長岡の火を守ろう」すなわち「いままでの積み上げを大切に、学習指導要領に従って、長岡の英語活動を守り続けよう」という教育長・教育部長・教委事務局・小学校長会がともに持つものである。

これを具現化していくのは容易なことではない。それを支えてくれるのが、学級担任から毎時間届けられる「英語活動振り返り」である。「全員が活躍できる活動だったので、どの子も目を輝かせていました。ALTと英語指導員の表情豊かなコミュニケーションに子どもたちはグッと心をひきつけられていました」という声が届いている。この振り返りは英語指導室が義務付けているもので、不評かと思いきやこれだけ評判がよいと、決して「火を消してはいけないのだ」と、思いを新たにす。

Ⅳ 結局、課題は小中の連携

このコーナー「Just Now」で多くの先生方が述べてこられたように中学校教師の意識改革が急がれる。

(1) 中学校への情報提供

まずは草の根でいく。英語教師と話す機会があれば、次のように言い続けている。「大変なことになります。小学校で70時間、つまり中学校の今のカリキュラムであれば1年生の10月頃まで、要するに一番のハネムーン期間が小学校に行きます。前倒しではないにしても先生ならどうします？ 私なら、話す・聞くコミュニケーションはもちろん、書く・読むコミュニケーションに向けての活動がもっと面白くて、楽しくて、知的好奇心を刺激するものになるよう工夫します。早ければ、平成22年度には、いままでと違う中学1年生が現れます」。

また、先に述べた拠点校での研究授業へは中学校教師最低1名の参加を義務付ける通知を出した。ALTも英語指導員も全員参加して、グループで授業をもとに討議をした。小学校外国語活動のねらいを多くの中学校の教師が理解していない実態が明らかになった。後日談として、小学校から「上から見下されているようで不快だった」と感想が寄せられた。

(2) 中学校英語教育研修の見直し

- ① 研修の回数を増やす。小学校でも2年間で30時間を行うわけだから、中学校もいままで通りという訳にはいかない。「研修の仕方」を指導していく必要もある。
- ② 小中担当者意見交換会を市教委主催で開催する。中学校区でも行われるが、全市的な視野から小学校と中学校の教師が「言いたいことを言う」機会を設け、現場で納得のいく方向性を見つけていく。
- ③ 『英語ノート』を受けて、言語活動を見直す研修講座の回数を増やす。中学校の言語活動がさらに知的好奇心を向上させるものにする。もうゲームは小学校でたっぷりやってくる。

生徒指導等で踏ん張る現場の状況は十分に理解している。学習指導要領が変わって「英語がますます楽しくなった。他とかかわる力がついた」などと小学校でも中学校でも、子どもも教師も言えるように『米百俵』の精神で職務に当たってきたい。

* 戊辰戦争（1868-1869）で敗れた長岡藩は財政が窮乏し、三根山藩から百俵の米が贈られた。しかし藩の大参事小林虎三郎は藩士に分け与えず、「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と諭し、売却金で学校を設立した。